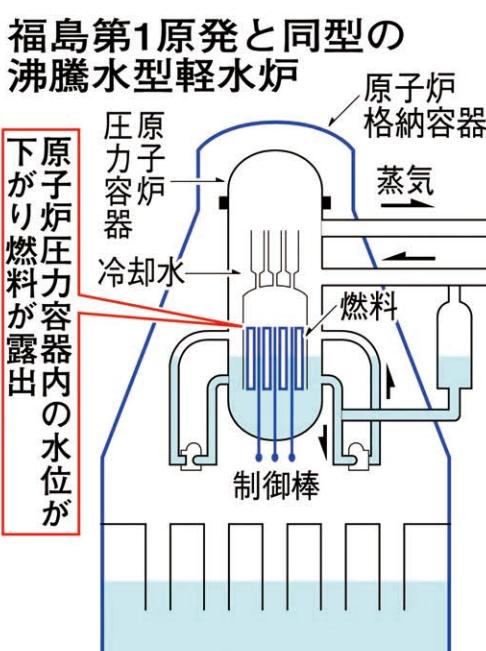


緊急措置ならず

首相官邸で開かれた、政府の原子力災害対策本部の会合=12日午前



しかし、炉心が過熱して冷却水が蒸気となつて失われるスピードが想像以上に速く、蒸気放出のための弁の操作に手間取っているうちに、水位が下がってしまったとみられる。

東京電力や経済産業省原子力安全・保安院は11日の東日本大震災の発生と原子炉の自動停止以来、核燃料が溶けるなど激しく破損することを避けるために、原子炉格納容器の蒸気を外に放出する緊急避難的な措置を進めてきたが、結果的に間に合わなかった。

福島第1原発1号機で炉心溶融が起き、原子力事故としては極めて深刻な事態となつた。

蒸気には一定の放射性物質が含まれているが、保安院は、避難範囲は半径10キロを変更する必要はなく、指示に従つて行動している限り住民の健康への影響が心配されるレベルにはならないとみている。

沸騰水型原発は、内側から①炉心の入った原子炉圧力容器②原子炉格納容器③原子炉建屋ーの3重構造となつていて、1号機は今回の地震により、このうち2番目の原子炉圧力容器の中に何らかの原因で蒸気が充满し、気圧が高まって放射性物質が漏えいしていた。

東電などは、さらに気圧が高まると格納容器自体が耐えられずに大きく破損し、放射性物質を含む蒸気が大量に外部に拡散。同時に、最も重要な放射性物質の閉じ込め機能が失われることを避けようとして、蒸気を人為的に放出する作業を進めていた。

極めて深刻な事態